〈第147回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」
音楽評論：東条碩夫

マーラー：交響曲 第9番 ニ長調

初演：1912年6月26日　ウィーン

多忙な指揮活動の中で生まれた大交響曲

この曲が作曲されたのは、1909年夏から翌年春にかけてであった。だが、両端楽章を支配する「死の予感」のような曲想とは裏腹に、マーラーの公的生活はこの時期、なお多忙を極めていたのである。

ウィーン帝室歌劇場（現・国立歌劇場）の総監督を1907年に辞したのち、彼は活動の拠点をニューヨークに置いていた。最初に就任したメトロポリタン・オペラの指揮者のポストは、あとからやって来たトスカニーニとの衝突などが原因となり、1年半で辞したものの、すぐに仕事の中心をニューヨーク・フィルハーモニック協会の指揮者としての活動に切り替え、その傍ら欧州に戻っては各地で自作の交響曲を指揮するという、精力的な音楽活動を展開していたのだった。とりわけ1910年9月に自らミュンヘンで行なった大管弦楽と大合唱による「第8交響曲」の初演は、音楽界の一大イヴェントと評されたほどである。

このように華麗な公的生活を続ける一方で、暗い性格の作品を書いて行くという不思議なギャップは、マーラーの若い時からもしばしば見られたものだった。その真相は結局、大芸術家の深層心理という謎の領域に踏み込まない限り、解き明かせないものであろう。だがいずれにせよ、この「9番」を仕上げた直後あたりから、マーラーの体調が徐々に悪くなり、持病の喉頭炎や、妻アルマとの結婚生活における諸問題に絡む精神的不安定などに悩まされはじめたのは事実だった。ニューヨーク・フィルとの活動は1911年2月21日まで続けたが、ついに健康は急激に悪化した。そして欧州に帰った彼は、5月18日に世を去るのである。遺されたこの「第9」をウィーンで初演したのは、マーラーの弟子にあたる大指揮者、ブルーノ・ワルターであった。

激しい感情の動きから静寂の浄化へ

曲は、4つの楽章からなる。

■第1楽章　思い悩むような、過去を回想するような主題で開始され、それはやがて感情の激しい動きに満ちた起伏を繰り返し、衝撃的な不協和音にも脅かされる。そして曲は次第に諦念のような、浄化されたような落ち着いた終結へ向かって行く。

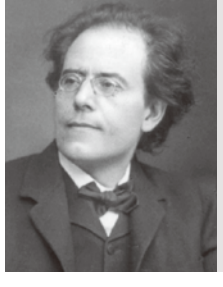
■第2楽章　「緩やかなレントラー舞曲のテンポで」と指定された楽章。「レントラー」とは、ドイツやオーストリアで親しまれたゆっくりとした3拍子の舞曲のこと。寛いだ雰囲気ではあるものの、マーラーらしい皮肉でグロテスクなニュアンスも感じられ、それほど明るい音楽とは言えない。

■第3楽章　「ロンド・ブルレスケ」（諧謔的なロンド）と題される。もし過去の回想であるなら、かなり辛辣な、道化芝居（ブルレスケ）のように戯画化されたものであろう。「きわめて反抗的に」という演奏指示が意味深長なものを感じさせるが、それは彼の生きざまを象徴していると評する識者もいる。

■第4楽章　マーラーの書いたアダージョ（極めて遅く）楽章の傑作のひとつで、圧巻である。それまでの激しい喧騒とは打って変わって、ゆったりとした大河のように幅広い主題が弦楽器群に登場する。冒頭から数分進んだ頃、分厚い響きの壮大な弦楽合奏を中心にホルンなどが加わり、主題が奏されて行く部分はこの楽章の圧倒的な頂点である。そして後半は次第に諦念、告別、浄化を思わせる楽想が強まって行き、最後は音が切れ切れになり、あたかも碧空に浮かぶ白雲のように、遠く遠く去って行く。

楽器編成	フルート4、ピッコロ、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3、E♭クラリネット、バス・クラリネット、バスーン4（コントラ・バスーン持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、スネア・ドラム、グロッケンシュピール、銅鑼、トライアングル、鐘、ハープ2、弦楽5部

作曲家プロフィール



グスタフ・マーラー

Gustav Mahler, 1860-1911

ボヘミアのカリシュトに生れ、ウィーンで他界した巨匠。11曲の交響曲（最後の曲は未完成）と多くの歌曲を作曲。音楽史上最大の交響曲作家のひとり。指揮者としても有名で、ブダペスト王立歌劇場、ハンブルク市立歌劇場、ウィーン帝室歌劇場の音楽総監督などを務め、晩年はメトロポリタン歌劇場やニューヨーク・フィルの指揮者をも務めた。特にウィーンでのオペラ上演における実績は、同歌劇場の歴史の中でもひときわ輝く存在である。